

短編集
―
兔の日

久野那美

内容

兔の日	3
タツの日	12
珈琲	20
時計 1999	29
銀杏	39
海まつり	48
兔の休日	57

兎の日

登場するもの 兎

女の子

夕方。線路の脇の公園。風の中を空き缶が転がっている。
大きな兎が1匹。空き缶を拾って、ゴミ箱へ放り込む。
女の子が一人。ぶらんこを漕いでいる。足音を立てて、兎は近づいていく。

兎 こんにちは。

女の子 ……こんにちは。

兎 隣、いいですか？

女の子 隣。……あ。どうぞ。

兎は隣のぶらんこに腰掛け、見よう見まねで不器用に漕ぎはじめた。
しばらく。女の子は気になるので時々見ている。

女の子 ……初めてですか？

兎 はい。初めてです。

女の子 あ。地面をね。こっやっつね。

兎 地面？こっですか。

女の子 そっ。そんな感じ。

兎 ありがとう。

女の子 いえ。

兎、だんだん上手になる。長い耳が風になびく。
ふたりは並んでぶらんこを漕いでいる。

兎 上手ですね。

女の子 そうですか？

兎 ええ。上手ですよ。

間

女の子 あの。

兎 はい。

女の子 兎さん…ですよね。(横目で見る)

兎 わかります？

女の子 ええ。わかりやすい形ですから。
兎 そうですか。

女の子 おおきいですね。

兎 ええ。おおきな兎なんです。

女の子 あったかそうですね。

兎 ……まあ。そこそこ。

女の子 いいですよ。この季節には。

兎 ……あなたは寒いですか？

女の子 ええ。少し。私は人間ですから。

ふたり、ぶんこを漕ぐ。それぞれの正面を向いて。
しばらく。

兎 わかりやすいのは形だけです。

女の子 え？

兎 見ただけでは分からないこともあります。

女の子 ？

兎 たとえば。

女の子 たとえば。

兎 人間を食べるんです。

女の子 あなたが？

兎 はい。

女の子 兎なのにな？

兎 兎なのに。

女の子 ……

兎 おどろきましたね。

女の子 ……

間

女の子だから、そんなに…

兎 そんなに？

女の子 悲しそうに。

兎 悲しそうに、見えますか。

女の子 ええ。

兎 そうですか…。

問

兎 人を食べる兎との付き合い方を、誰も知りません。僕にもわからないんです。女の子 それは、悲しいことなんですか？

兎 かなしいこと…。(肯定も否定もしない)

勉強しました。法律や、文学や、哲学や、科学…。法律は人を食べる兎を裁いたりしないんです。だから、僕には罪がないのかもしれないと思いました。でも、法律は人を食べる兎の権利のことも、説明したりしませんでした。

文学や、哲学や、科学が教えてくれるのは、人間と世の中のことでした。正しいことや間違ったことについてでした。人を食べる兎のことではありませんでした。

女の子 文学。

兎 はい。

女の子 哲学。

兎 はい。

女の子 科学。

兎 はい

女の子 あなたは、哲学も食べるの？

兎 いいえ。僕は哲学は食べません。文学も科学も食べません。

女の子 食べないんですか。

兎 食べません。

女の子 そう。

兎 哲学を食べる兎には哲学を食べる兎の悲しみがあるのかもしれない。でも、それは僕の悲しみとは違います。

女の子 …。

兎 生きるために。食べないと死んでしまうんです。この町の人もみんな、食べてしまったんです。

女の子 この、町の人…。

風が吹く。

女の子 あなたは、ひどい兎なのね。

兎 そうです。ひどい兎なんです。

女の子 ひどい兎が悲しいなんて勝手じゃない。
兎…

女の子 それでも、あったかいですか？

兎 あったかいです。食べたもの分だけ、体温が上がるからです。

女の子じゃあ、あったかいと悲しいんですか？

兎 あったかいと悲しいです。

女の子それは、あなたがひどい兎だからですか？

兎 そうです。

女の子ひどい兎…。ひどい兎は、あったかいと、悲しい…。(何か考えている。)

しばらく。長い間。ふたりとも黙っている。
いろいろ考えて。女の子はぶんこを止める。兎もつられて止める。

女の子 やっぱり、わからない。

兎 え？

女の子分かるのは、形だけ。

兎 (女の子を見ている)

女の子見てわかること。

兎。おおきい。あったかそう。

兎 …。(女の子を見ている)

女の子ほかのことはわからない。

兎 …。

風が吹く。ふたり、同時に瞬きする。
なんだか少し、楽しくなる。兎も。楽しくなる。

兎、女の子の後ろへ回り、背中を押す。
ぶんこは大きな弧を描いて宙に出ていく。
ぎいぎいっ。しばらく。
ぎいぎいっ。ぎいぎいっ。
やがて。ぶんこが止まる。

兎 …寒いですね。(空を見ている)

踏切の音。大きくなる。
電車が通過する。長い電車。
静寂。

風の中。ぶらんこが頼りなく、いつまでも揺れている。

タツの日

登場するもの：兎

タツ

兎 1月1日。快晴。公園はしんと静かだった。

町にはもう、人がいない。

次の町へ向かわなくては。

無性に話したくなる。

誰かに聞いて欲しいのに。聞いて欲しい時にはいつも、その誰かがいない。

ふと。後ろで誰かの気配がした。

もう、誰もいないはずなのに。

振り返ると：大きなタツが、丸い目でこっちを見ていた。

タツ あけましておめでとございます。

兔 タツは軽く会釈をし、新年の挨拶をした。
隣のブランコへ腰掛けると、不器用にこぎ始めた。
ブランコが揺れるたび、大きなしっぽがじゃりじゃりと地面をえぐった。
ブランコに乗るのに適した形をしていないのだ。

じゃり、じゃり

タツ 兔さん…ですよね。
兔 わかります？
タツ ええ。わかりやすい形ですから。
兔 ……わかりやすいのは形だけです。見てわからないこともありませんよ。
タツ ……？
兔 ひとを食べる兔の話…、聞いたことがありますか？
タツ ひとを食べるんですか。
兔 はい。
タツ あなたが？

兔 ええ。
タツ ふふっ。兔なのに？
兔 兔なのに。
タツ ふうん。
兔 ……。

間

兔 食べないと死んでしまうんです。この町の人もみんな、食べてしまったんです。
タツ この、町の人…。(ぼおっ炎を吐く)
兔 ……炎を吐きましたね。
タツ ……ごめんなさい。
兔 いえ…。
タツ きいていますよ、ちゃんと。
兔 ……
兔 人を食べる兔との付き合い方を、誰も知りません。僕にもわからないんです。

勉強しました。法律や、文学や、哲学や、科学……。法律は人を食べる兎を裁いたりしないんです。だから、僕には罪がないのかもしれないと思いました。でも、法律は人を食べる兎の権利のことも、説明したりしませんでした。文学や、哲学や、科学が教えてくれるのは、人間と世の中のことでした。正しいことや間違ったことについてでした。人を食べる兎のことではありませんでした。

タツ 文学……(ぼおっ炎を吐く)

兎 はい。

タツ 哲学……(ぼおっ炎を吐く)

兎 はい。

タツ 科学……(ぼおっ炎を吐く)

兎 はい

兎 ひどく疲れてきた。タツは炎を吐きながら、顔色一つ変えずにブランコをこいでいた。

タツ 何をやっても、どうしようもないんですね。

兎 ……

タツ 兎なのにね。

兎 タツは七色の炎を吐いた。

なんだか嫌な気持ちになった。

こんなことまで言われたことはなかった。

それは、きつとその前に……

兎 あなたも人間を食べるんですか？

タツ いいえ。

兎 ……タツって、は虫類なんですか？

タツ ……(無視)

兎 卵を産みますか？

タツ ……(無視)

兎 ……空を飛びますか？

タツ ……(無視)

兎 休みの日は何してるんですか？

タツ (ぼーんぼーんっ大きな炎を吐く)

兎 …ごめんなさい。質問されるのは嫌いですか？

タツ 答えられないんです。何を聞かれても。

兎 ???

タツ 存在しない生き物だから。

兎 え？

タツ ほんとはね、いないんです、どこにも。正しいタツも、間違ったタツも。

兎 だって…。

タツ あなたは今、私と話をしているけれど、ほんとはそんな気がするだけ。

あなたが、そう思ってしまっただけ。

兎 …。

タツ だからわたしは人間を食べたりしないし、兎も食べたりしないし、あなたも私を食べることができない。

兎 …。

風が吹く。

タツ (ぶるぶるとぶるえる)

兎 ……寒いですか？

タツ 平気です。寒い時は炎を出しますから。

兎 タツは地面に降り、大きな炎を吐いた。

炎はブランコをひとつ燃やした。

……ぶらんこはひとつだけになった。

タツは仕方なく、ぶらんこを降りて、物欲しそうにこちらを見ていた。

タツ 何処行くんですか？

兎 おなかがすきました。ここにはもう、食べるものがありません。

タツ 乗らないんですか？

兎 はい。

タツ ふうん。

兎 背後でじゃりじゃりと音がした。振り返ると、タツが残ったブランコをこいでいた。

タツ さよなら。(ぼおっ)
兎 …さよなら。

兎 タツに背を向けて、てくてくと歩いた。
次の町は遠かったけれどやがてたどり着いた。
空腹になるとひとりづつ、人間を食べた。
誰かに話したいとき、いつもそこには誰もいなかった。
空っぽの町をあとにするたび。タツのことを思い出した。
また、どこかで会えるだろうか。
どこにもいないはずのタツは今もあの公園にいて、
大きなしっぽをひきづって、
窮屈そうにブランコに乗っているような気がしてならない。
そういえば。あの日。
初めて誰かに「さよなら」を言ったのだった。

珈琲

登場するもの マスター

女

外には強い風が吹いている。
からん。
重いドアを開けて女が入ってくる。
店の中は暖かいが人気がない。
薄暗い中でコーヒーを沸かす音がこぼこぼと聞こえている。

女 …あ。もう閉まっちゃいました？

マスター …いいえ。

女 あの…

マスター 明日からなんです。今日はまだ準備中。

女 あら…。そうなんですか、すみません…。

マスター 雪ですか？すごい風ですね。

女 ええ。

マスター すきまから風が入るんです。そこは寒いでしょう。

女 あ…
マスター 奥へどうぞ。珈琲しかできませんけど。
女 え？でも…。
マスター よかったら一杯、飲んでってください。
女 …。
マスター お客さん第一号には、コーヒを一杯サービスすることにしてるんです。
女 …
マスター あなたがこの店の最初のお客です。
女 …いいんですか？
マスター お好きなカップで一杯。
女 すみません。

女は椅子に腰掛ける。目の前のカウンターには大きさのまちまちな珈琲カップがならんでいる。

女 どれでもいいんですか？
マスター ええ。

女 わあ。たくさん…。迷っちゃいますね…。
マスター みなさん、そうおっしゃいます。
女 …
マスター ですけど…
女 … え？
マスター いえ。さあ。どれにします？
女 どのカップがおすすめですか？
マスター あなたの好きなのにしてください。私には選べません。
女 …？
マスター はじめてのお客様のことはいつまでも覚えていきます。そのとき選んだカップの色も…。ですから、どのカップを見ても誰かのことを思い出す…。それを他のひとにすすめることはできません。ひとつを選んで手に取ることもできません。
女 ……
マスター あなたが選んで下さい。私はそのカップに、あなたのための珈琲を注ぎます。それはあなたの珈琲で、そしてそれはその間あなたのためのカップです。

短編集

女 お客の選んだカップをみんな覚えてるんですか？
マスター ええ。みんな。

女、目の前の大きな白いカップを手取る。

女 ……これにします。
マスター はい。

女の選んだカップをとりあげ、マスターは珈琲を立て始める。

女 お店は、これまでも…？
マスター (笑っている) ええ。これまでもう数え切れないほどの店を開けたり
閉めたり。

はじめてのお客様はその度にひとりずつ…。

女 これまでは、どんなお店を？

マスター どんなって、珈琲の店ですよ。

女 珈琲の店…。

マスター ええ。同じような。

女 ……同じような…。

マスター いろんな町を転々としましたが、珈琲の店しかできませんでした。

女 そうなんですか。(なんだか府に落ちない)

珈琲が沸いた。マスターは女の選んだカップの中に珈琲をそそぎ込む…。

マスター はい。どうぞ。

女 ……すみません。

しばらく。

女は黙って珈琲を飲んでいる。

マスターは女に背中を向け、洗い物をはじめた。

店の中は水の音、食器の触れあう音、音楽だけがしずかにひびく。

やがて女がひとりごちのように口を開いた…。

女 はじめてのお客がくるのはきつといつも開店の前の日。
マスター ……？

女 マスターは店に入ってきた客にカップを選ばせて、入れ立ての珈琲を1杯注ぐ……。
マスター ……

女 来るか来ないかわからないお客をそうやって待っている。

マスター ……?

女 看板を出さないで。でも窓の灯りはつけたまま、珈琲の香りを立てて…。

マスター ……

女 正確に言うど待ってるわけじゃない。だって店はまだ開いていないし、お客に出すメニューもそろっていない。

マスター ……

女 そんなところへ「もしも」お客が入ってきたとしたら、それは思いがけないお客で、来るはずのなかったお客で、この店のほんとうの客じゃない。

マスター ……

女 そのお客に、1杯目の珈琲をサービスする…。

マスター ……

女 苦みの利いた、こくのある、おいしい珈琲をサービスする…。

水の音が止まる。マスターが洗い物を終え、カウンターに戻って来る、

マスター ……わたしの店のことですか？

女 いいえ。私のこと。私がおもし珈琲のお店をもつてたらやってみたいことです。

マスター ……？

間

女 新しいお店を開ける前って…

マスター はい？

女 ドキドキしますか？

マスター ……ええ。

女 さっき終わったはずのものだったたくさんあるのに、何もかもが今始まったばかりのような気持ちになつてそわそわしますか？

マスター ……ええ。

女 どこへ行っちゃうんでしょね。

マスター ……ええ？

女 きっとどこへもいかないんでしょうね。
マスター え？
女 きっとずっといつまでもそのままここに止まっています。
マスター …？
女 他のものがどんどん変わっていく…。

しばらく。
女はコーヒーを飲み干し、立ち上がる。

女 ごちそうさまでした。
マスター また、飲みに来て下さい。苦い珈琲。
女 ええ…でも…残念ですけど…。
マスター ?
女 ここへはもう来ません。
マスター …
女 引越すんです。明日。
マスター そうなんですか

女 ええ。やっど。
マスター やっど？
女 じゃあ。さようなら。
マスター …さようなら。気を付けて。
女 ありがとう。

女は最後に振り返り…

女 ……あの…私…
マスター …このいちばん大きな白いカップでしたね。
女 …ええ。

からん、ドアをあけ、女が出ていった。
外にはまだ、強い風が吹いている…

時計1999

登場するもの 時計屋

少女

除夜の鐘が鳴っている。
大晦日。底冷えのする夜中の商店街。人の気配はなく、
錆びたシャッターを、風がかたかたと撫でていく。
アーケードの向こうから少女がひとり。足下を見ながら歩いて来た。
靴音がこだまする。少女はひとあしごとに数を数え続けている。

少女 …、1993、1994、1995、1996、1997、1998、1
999

靴音が止まる。
商店街のはずれ。1軒だけ、シャッターが半開きになっている店の前。
中から灯りが漏れている…。
店の中からはチクタク、チクタク、秒針の動く音。
そして低い男の声が聞こえてくる…

「11時45分。45分1秒。45分2秒。45分3秒…」

風が吹く。シャッターがかたかたと鳴る。
少女、かがんで店の中をのぞき込む。
年取った男がひとり。椅子に座って時計のネジを巻いている。
ネジを巻き、秒針を合わせている。

時計屋 (ふと、気配に気づいて) 誰かそこにいるのかい?

少女 …:こんばんは。

時計屋 お客さん?

少女 …:いえ…。こんな夜中に買い物しません。ここは…、何のお店?

時計屋 見ての通り。

少女 見ての通り…

時計屋 時計屋だよ。

少女 時計屋?…:こんな時間に?

時計屋 おじょうちゃんこそ。こんな時間にひとりで…。

鐘が鳴る。

時計屋 ああ。除夜の鐘なら一筋向こうだ。
次の角を東へ曲がってまっすぐ行くと正面に寺がある。

風が吹く。

時計屋 今夜は冷えるね。

少女 ちょっとだけ…中に入ってもいい？

時計屋 …ああ。ちょっとあったまっておいで。

少女、シャッターをくぐって中へ入ってくる。
店の中には大小種類のさまざまなたまご時計がおかれている。
ちくたく、ちくたく、秒針の動く音がする。

少女 時計屋さん…。何、してるの？こんなおおみそかの夜に。

時計屋 (笑って) 大晦日の夜には大掃除だ。

少女 大掃除？

少女、店の中を見回す。

時計屋 ときどきこうやって大掃除してやらないと。

少女 時計を…？

時計屋 手入れをしないで放っておくと、やがて使いものにならなくなる。

少女 ?

時計屋 正しい時間を報せることができなくなる。

時計屋はネジをまいたり、分解して歯車をけずったり、埃を吹き払ったりしている。

少女 どうして？

時計屋 どんなにきちんと合わせておいても、針は毎日すこしずつずれていく。

少女 …ずれていく？

時計屋 ネジは気温や湿度の変化で少しずつ緩んでいくし、

歯車は毎日少しずつすりきれれる。歯車と歯車との間には隙間が空く。埃だつてたま

少女 ……ふうん。

時計屋 それじゃあ、売りものにならない。

少女 ……うん。

時計屋 いつも正しい時間を差せる状態にしておかないと。

少女、店の中を歩き周り、時計を見ている。

少女 大きい時計。針の太い時計。円い時計。四角い時計。振り子のついでる時計。バンドのついでる時計。鎖のついでる時計。鳩の出でくる時計…。

ひとつの時計の前で、ふと立ち止まる…。

少女 ……どうしてこの時計だけ時間が違うの？

時計屋 (大掃除を続けながら) 動かないんだよ。

少女 どうして？

時計屋 止まってしまったから。

少女 いつ？

時計屋 ずうっと昔のその時間に。

少女 12時ちょうどに？

時計屋 12時ちょうどに。

少女 どうして？

時計屋 ……。(無視してネジを巻いている)

少女 落としたから？

時計屋 ……。(無視してネジを巻いている)

少女 ネジがなくなったから？

時計屋 ……。(無視してネジを巻いている)

少女 治らないの？

時計屋 ……。(無視してネジを巻いている)

少女 ……止まってしまふまでは、動いてたの？

時計屋 ……その日の、その時間までは。

時計屋は、時計を掃除しながら話している。

少女 正しい時間を差せない時計が、どうしてお店においてあるの？
時計屋 (手を止めて) 針は毎日完全に同じ速さで動くことはできない。
手入れをしても、どうしても少しずつずれていく。

時間を追いかけて、おいついて、たまに追い越される。
完全に正しい時間を差すことはできないんだ。

少女 ……

時計屋 絶対に正しい時間を差すことができる時計は、ほんとはそいつだけなんだよ。

少女 ?

時計屋 1日2回。時間の方が時計に追い付く。

少女 そんなの…。じゃあ、他の時計はなんのために「手入れ」するの？

時計屋 目で見てわからないような小さな小さなずれなんて、実は全然どうってことはない。ちゃんと手入れしてさえいけば、困らない程度に正確な時計を知ることが出来る。

少女 ……

時計屋 ちゃんと、使いものになる。

少女 ……

時計 動かない時計は使いものにならない。

少女 じゃあ、どうして…

少女、耳を澄まして時計の針の音を聞く。

かち、かち、かち、秒針のうごく音が大きくなる。

それは実はひとつではなく、無数の秒針の音が少しずつ少しずつ、微妙にずれながら幾重にも重なっていたのだ…

外では除夜の鐘も鳴り続けている。

時計屋 おや。もうこんな時間だ。もうじき…今年もおしまいなる。

かち、かち、かち、秒針のうごく音。音。音。

少女 (困っている) 今、いちばん正しい時間は、どれなの？

秒針の音はだんだんに大きくなって…

やがてそれぞれがばらばらに止まった…。
静寂…。しばらく。
少女、時計を見渡す…

少女 ぜんぶ、12時を越えちゃった。
大きいのも、針の太いのも、円いのも、四角いのも、バンドのついてるの
も、鳩の出てるのも…。

…だけど……………(止まったままの時計を見ている)

しばらく。

時計屋 しまった。ずいぶん長居させたね。新しい年が明けてしまった。

少女 私…

時計屋 うん？

少女 私…

時計屋 (少女の様子がおかしので怪訝な顔で見ている)

店のなかはさっきまでとおなじく、平凡な時計の音に包まれている。

少女 もう行きます。

時計屋 ああ…そう。気を付けてお行きよ。

少女 ありがとう。

時計屋 外は寒いし、風も吹いてる。

少女 はい。

少女、シャッターをくぐって外へでる。

少女 ありがとう。…………さようなら。

時計屋 さよなら。気を付けて。(また、ネジをまきはじめる)

少女 2001、2002、2003、2004…

ひとあしごとに数えながら。少女の声、靴音、だんだんと小さくなる。

銀杏

登場するもの：翔子

松村

斜めに日の射す美術室。翔子が画材を広げている。
松村が入ってくる。翔子の後ろに立って。

松村 何描いてんの？

翔子 壁。

松村 壁？

翔子 あそここの、マンションの、壁。4時の壁。

松村 4時の壁。

翔子 時間が経つと色変わるから。

松村 (壁を、見る) 古いね。ずいぶん。

翔子 このあたりで一番古いよ。きっと。

松村 誰が住んでるんだろ。

翔子 知らない人。

松村 そうだけど。
翔子 知ってる人も住んでるかもしれないけど。
松村 …。

間

松村 なんで汚れんのかな。

翔子 え？

松村 誰も触らないのに。

翔子 だって。雨とか。風とか。出しっ放しだから。

松村 そっか。

松村、壁を描いている翔子と翔子に描かれている壁を見ている。

翔子 何してんの？

松村 別に。

翔子 そう。

松村 …。
翔子 あっちのマンションの壁、描く？
松村 …。

間

翔子 めずらしいね
松村 たまにはいいかな、と。
翔子 芸術の秋ですか。
松村 秋は関係ない。
翔子 そう。
松村 芸術も、関係ない。
翔子 そう。
松村 …美術部、なくなると困る？
翔子 困りはしないけど。
松村 別のところ入るの？
翔子 どうしようかな。どうするの？

松村 うーん。
翔子 つぶれるかな。
松村 ふたりじゃね…。

松村は壁に立てかけてあるキャンバスを見ている…。

松村 …あいつ、なんで色ぬらなかつたのかな。
翔子 ……。
松村 銀杏の木。
翔子 (キャンバスに描かれた絵を見ている) 銀杏の木…。
松村 銀杏の木。
翔子 ちっとも知らなかった。いつの間に描いてたんだろ。
松村 あれ。

窓のそと。運動場の隅に銀杏の木が数本。風に吹かれて立っている。

翔子 色変わっちゃうよ。

短編集

松村 …
翔子 銀杏の木。
松村 うん。

間

翔子 なんで美術部入ったの？
松村 ……なんでかな。
翔子 ほんとに部室こないじゃない。
松村 ……。
翔子 描いてるとこみたことないし。
松村 今日は来てる。

間

翔子 中学の時も美術部だった？
松村 いや。ギター部。

翔子 今時そんなのがあるの？
松村 すぐつぶれた。部員集まらなくて。
翔子 どこも大変だ。
松村 伝統あるクラブだったらしい。
翔子 ふうん。

松村、おいてある日誌ををばらばらめくっている。

松村 9月3日。
翔子 ……。
松村 (日誌に書き込んでいる) えーと、9月3日木曜日。曇り。
翔子 さっきまで晴れてたのに。

間

翔子 日記って。
松村 え？

翔子 なんて自分のことと、暦のことと、空のことと書くんだろ。
 松村 空？
 翔子 今日がいつで、自分は何をして、空はどんなだったのか。

松村、日誌をめくっている。

翔子 8月5日。水曜日。曇り。8月6日木曜日。晴れ。8月7日金曜日。雨。

8月8日土曜日。雨。8月9日。日曜日。晴れ。：

翔子 もうすぐ1年だね。

松村 …。

翔子 銀杏はいつ色が変わるの？

松村 え？

翔子 あの日は、もう黄色かった？それともまだ…

松村 ……

翔子 ここにいたんでしょ。

松村 なんて花飾るのかな。

翔子 は？

松村 後ろの席から黒板見えないじゃないか。

翔子 ……黒板見えないから教室にいなかったの？

松村 そう。

翔子 ……まあ……夏の花は…高張るし…。

松村 夏の花だったのか。

翔子 何で怒ってるの？

松村 9月はまだ夏なのか。

翔子 だって…、しょうがないよ。まだ暑いじゃない。

松村 夏休みはもっと暑かった。

翔子 そう？

松村 …。

翔子 ……暑かったね。

松村 …。

翔子 涼しくなるよ。これからどんどん秋になる。

松村 …。

翔子 去年もそうだった。おとしもそうだった。来年も、再来年も…。

松村 ……。
翔子 でもね。夏の花だったよ。あれ……。だって、まだ暑かったもん。

間

松村 なんて色塗らなかつたんだよ。あいつ。

翔子 ……。

松村 わかんないじゃないか。

翔子 ……なんで怒ってるの？

松村 わかんないじゃないか。夏の銀杏だったのか。秋の銀杏だったのか。

風に乗って。薄からし色の銀杏の葉がゆっくりと舞い落ちた。
ころなしか日差しもすこし和らいで。秋の気配が近づいている…。

海はしつ

登場するもの：運転手

女

ラジオをかけ、海沿いの道をのろのろ走っているタクシー。
窓の外は雨。ワイパーがリズムカルに雨露を拭いている。
強い風と雨の中。
バス停の屋根の下にいる女をみつけ、思わず車を止める…

運転手 (窓を開け) お客さん、どこまで？

女 え？

運転手 バス待ってるんでしょ。

女 え？はい。

運転手 待ってても来ませんよ。

女 え？？？

運転手 雨も当分、止みません。

女 え？

運転手 これからどんどんひどくなります。
女 …あ…(困っている)。
運転手 (ドアを開ける)どこまで？
女 あ…。はい。

女、なんとなく、車に乗り込んでしまう。
車、走り出す。

女 バス…、来ないんですか？(怪訝な様子)
運転手 ええ。
女 でも、時刻表に…。
運転手 観光ですか？
女 …ええ。まあ…。
運転手 ここは、初めて？
女 …。
運転手 海まつりの日は、バスは走りません。
女 海まつり？

運転手 ご存じない？…そうですか。
女 すみません。
運転手 いえ。いえ。

カーブを曲がる。

女 ……おおきなおまつりなんですか？
運転手 海まつりは大きなまつりなんです。町ではいちばん大きなまつりです。
女 へえ。
運転手 だけど、地味なまつりです。
女 は？
運転手 ほんとうに地味なまつりです。あなたが知らないのもしょうがない。町の人間もほとんど忘れてるくらいですから。
女 忘れて…るんですか。
運転手 地味なまつりですからね。
女 海まつりって…町の人は…何をするんですか？
運転手 町の人間は何もしません。

女 何も？

運転手 ええ。何も。

女 じゃあ、なにが？

運転手 雨が降るんです。

女 雨？

運転手 海に雨が降るんです。一日中、降り続けるんです。

女 そんなおまつりなんて、聞いたことありません。

運転手 地味なおまつりです。でも大きなまつりです。

女 バスも…お休みするんですか。

運転手 こんな雨の日に、外に出る人間はいませんから。

雨の中。車は走っている。

運転手 宿はどこらですか？

女 ……その…。海まつりを…。見に行くことはできるんですか？

運転手 もちろんです。海へ寄りますか？

女 ……ええ。おねがいします。

運転手 いいんですか？このまま行って。

女 特に予定がある訳じゃないから。

運転手 わかりました。(海へ向かう) おひとりですか？

女 はい。

運転手 誰かに会いに？

女 ……いえ。

運転手 海へはよく行かれるんですか？

女 昔は、よくいききましたけど。

運転手 泳ぎに？

女 いえ…写真撮りに。

運転手 写真を撮られるんですか。

女 今は撮りません。ずうっと昔。

運転手 どんな写真ですか？

女 どこでとったのかわからない写真だって言われました。

運転手 へえ。風景の写真ですか？

女 ええ。

運転手 今は？もう撮らないんですか？

女 辞めたんです。撮った写真も、持ってた写真も全部、燃やしてしまいました。
運転手 燃やした？それはまた。1枚も、残ってないんですか？

女 はい。…ああ、……………1枚。

運転手 え？

女 1枚だけ…残ってるかもしれませんが…。

運転手 どこに？

女 今でも残ってるのかどうかわからないけど。

運転手 え？

女 部屋を出て来るとき。その窓に張り付けてきました。

運転手 窓に？どうして？

女 そのひとの部屋から、あの海が見られるように。

運転手 ・・どうして…？

女 どうしてでしょう。「これはもうおしまいになりました。でも、最初にちゃんとここにありました。」って、確認したかったのかもしれませんが。

運転手 ………………あなたが？

女 え？……………きつと。わたしも。

運転手 海の写真…。

女 ええ。…どうして？

運転手 こんな風な海でしたか？

女 え？

運転手 いえ。この町を走ってますとね、お客さんがよく、海の話をしてくれます。だから…。

女 海の話？

運転手 「知ってる海に、なんだかよく似ているから。」って

女 ここが？

運転手 海の他に何も無い町でしょう。ほら、海辺の町の風景は、どこもよく似ていますから。

女 ……

運転手 この町の向こうに、きっとその海が見えるんでしょうね。

車が止まる。

波の音が高い。雨が降り続けている。

運転手 着きました。降りてみますか？

バタン、ドアを開ける音。すごい風と雨と波。

女 ……海まつりって…何のおまつりなんでしょう？

運転手 海まつりは、海のまつりです。

女 どっちの海？

運転手 え？

女 ……すごい雨ですね。

運転手 風も。波も…。町が主催するまつりとはスケールが違います。

女 どこが主催してるんですか？

運転手 海まつりは、海のまつりです。

風の音。波の音。雨の音。しばらく…。

女 似てませんよ。

運転手 え？なんですか？（音がうるさくて聞き取れない）

女 どれも…。

運転手 え？え？なんですか？

女 だから…。

運転手 え？

一瞬、風が止む

女 今日。雨が降っててよかった。あの日は…とてもお天気がよくて…

運転手 お天気の日は、海まつりは行われななんです。雨の日だけです。

海に、雨が降る日だけです。

雨の音。波の音。いつまでも。

兎の休日

登場するもの：兎（♂）

兎（♀）

誰か

誰か　　むかしむかしあるところに。大きな兎がおりました。

白くて、ものすごく大きくて、丸いしっぽがついていて、

赤くて丸い目をしていました。

兎は生きるのが好きでした。

いつも食べていないと死んでしまうので。どんどんどんどん食べました。

まず、野菜を食べました。

野菜がなくなると木や草を食べました。

昆虫を食べました。

小動物を食べました。

次には大きな動物も食べてみました。

どんなものでも、食べることができました。

短編集

短編集

食べるとちよっとだけおなががいっぱいになりました。

身体もぼかぼかとあたたかくなりました。

それはとても幸せなことでした。

だけどすぐにまたお腹が空くのです。

食べるととても幸せな気持ちになりました。

食べ終わったあとだけがとても幸せな時間でした。

だからいつもひとりでした。

誰かと一緒にいるときは、誰かを食べるときでした。

他の動物も食べてみました。

人間も食べてみました。

友達の兎も食べました。

友達でない兎も食べました。

面識のなかった兎も食べました。

椅子やテーブルも食べてみました。

山や建物を食べました。

町をまるごと食べました。

兎にはともだちがいませんでした。なんでも食べる兎との付き合い方を、誰も知らなかったから。

法律も文学も、哲学も科学も、そんなことは教えてくれませんでした。文学や、哲学や、科学が教えてくれるのは、人間と世の中のことでした。正しいことや間違ったことについてでした。

なんでも食べる兎のことではありませんでした。

法律は、なんでもたべる兎のことを裁いたりはしませんでしたが、なんでも食べる兎の権利についても説明してはくれませんでした。

兎は法律を食べ、文学を食べ、哲学を食べ、科学を食べました。

町という町を食べ尽くし陸という陸を、海という海を食べ尽くしました。音も、光も、風も…、みんなたべてしまいました。

やがて世界は空っぽになりました。

静かな真っ暗な闇の中で。兎は完全にひとりっきりになりました。

いえ…なっただはずでした。

真っ暗で何も無い世界の中に。ひとりで取り残されているはずでした。けれども…。

真っ暗な、何も無い世界の中にいたのは1匹ではなく2匹の兎でした。

空っぽの世界を挟んで。同じような2匹の兎が向かい合っていたのです。

兎(♂) どうして会わなかったらう。今まで。一度も。

兎(♀) どうしてだろう。…通りすがりに何度も会ったのかもしれないよ。

兎(♂) 僕と同じような兎がどこかにいるかもしれないなんて考えたことなかった。

兎(♀) 私も。考えたことなかった。だから…会えなかったのかもしれない。

兎(♂) 世界中になんにもなくなって。真っ暗になって。他のものは何も見えなくなっただのに。

兎(♀) 今だって、見えないじゃない。

兎(♂) 見えないよ。君はほんとにそこにいるの？

兎(♀) あなたは？ほんとにそこにいるの？

兎(♀) ねえ。

兎(♂) ？

兎(♀) 耳に触ってもいい？

兎(♂) え？

兎(♀) だって、こんなに真っ暗じゃ、貴方の形がわからない。

兎(♂) ああ・
兎(♀) ほんとにそこにいるのかどうかもわからない。
兎(♂) :
兎(♀) だって、こんなに何にもないんだから…。
兎(♂) しょうがないよ。
兎(♀) うん。しょうがない。
兎(♂) 寒い？
兎(♀) 寒くない。
兎(♂) あったかいね。
兎(♀) うん。あったかい。
兎(♂) あれだけ食べたんだから。
兎(♀) 食べたもの分だけ、体温があがるのよ。
兎(♂) . . .
兎(♀) 生き物だからね。
兎(♂) うん。
兎(♀) ねえ。
兎(♂) え？

兎(♀) おなか空いてる？
兎(♂) いや。君は？
兎(♀) 私も。
兎(♂) : 痛い。
兎(♀) ごめん。
兎(♂) 痛いよ。そんなにひっぱったら…
兎(♀) ごめん。
兎(♂) しかもねじるなよ。
兎(♀) ごめん。
兎(♂) : 兎の耳は敏感なんだから。
兎(♀) 知ってる…
兎(♂) :
兎(♀) だけど何かに触ってないと、自分がどこにいるのかわからなくなる。
兎(♂) : 食べてる時はそうじゃなかった。
兎(♀) うん。
兎(♂) 食べたものがすとんとすとんと身体の中に落ちていった。そして体温が上がっていった…。だけど暖まれば暖まるほど。世界はどんどん遠ざかっていった。

兎(♀) 今は？
兎(♂) …。

間

兎(♀) ねえ。…おなか空いてる？

兎(♂) …いや。今は何も食べたくない。

兎(♀) 私も。

兎(♀) どうしようか。

兎(♂) え？

兎(♀) こんな何にもない真っ暗な世界の中で。

兎(♂) …

兎(♀) 僕たちが食べてしまった、空っぽの世界の中で。

間

兎(♀) ねえ、

兎(♂) うん？

兎(♀) 寒かったねえ。

兎(♂) …うん。

兎(♀) 食べても、すぐ、寒かったねえ。

兎(♂) うん…。

兎(♀) ずっと、寒かった。でも…。

兎(♂) …

兎(♀) …痛い。ひっぱらないでよ…。

兎(♂) …ごめん…。

誰か 兎が時間も食べてしまったので。

それから一体どれくらい経ったのか、誰にも分かりません。

ある日。雌の兎は大きな大きな丸い卵を産みました。

それは固い殻に包まれて、白く鈍く光っていました。

真っ暗な闇の中に、白い光が生まれました。

遠くから眺めれば。

卵の殻には2匹の兎の影がうっすらと映っているのが見えました。闇の中。卵は2匹の兎の間で、いつまでも白く光っていました。

固い殻の中には、世界がひとつ入っていました。

そこには兎がかつて食へてしまったものがみんなひとつおりそろっていました。2匹の兎だけが…その中には居ませんでした。

終

短編集

短編集Ⅰ 兔の日

二〇一六年一月七日初版第一刷行

著者 久野那美

発行者 久野那美

nami.sparrow@gmail.com

※上演に関するお問い合わせは右記まで。